

# 1-3 日本人の英語「発信力」の20の問題点とは！

## 1 音声・ディリバリー面

1. 発音がカタカナ的で通じないか、誤解を招く。
2. 英語はストレス・イントネーションが重要であり、それによって意味が大きく変わることを知らないため、その使い分けができない。
3. 英語にリズムがなくゴツゴツしている。
4. 話すスピードが遅すぎるか、あるいは速く話そうと焦って英語が乱れ聞き取りにくい。

## 2 語彙面

1. 外来語の弊害で英単語を誤用してしまう。
2. 英和辞典で覚えた単語の意味につられて、正しく語彙を使えない。
3. 英単語の意味の広がりをつかめていないため正しく語彙を使えないか、非常に限られた使い方しかできない。
4. 類語の使い分けができない。
5. 単語の結びつき（コロケーション）を知らないので正しく語彙を使えない。
6. 非常に頻度の高い日本語を英語で言えない。
7. ネイティブの子供でも使える基本動詞、句動詞を使いこなせない。

## 3 文法面

1. 時制のミスが非常に多い。
2. 前置詞のシンボルがつかめていないのでよく使い方を間違える。
3. 助動詞の機微が使いこなせない。
4. 冠詞や名詞の可算・不可算でことごとく間違える。

## 4 発想面

1. 日本語の発想から来る英語を使って通じない。

2. 物事を論理的に分析し判断する力が欠けており、頭の中で意見がまとめられない。
3. 理路整然と話せないので通じにくい。

## 5 背景知識

1. 世界情勢や欧米の文化に関する知識が乏しくて、様々な話題についていけない。
2. 日本のことをよく知らないため、外国人に聞かれても答えられない。

## 1 音声・ディリバリー面

日本語の発音は「胸式発音」で、ストレスもイントネーションもあまりありません。この方法で、「ストレス (stress-based) 言語」、「イントネーション (intonation-based) 言語」である英語を発音してしまうため非常に聞き取りにくくなるのです。今まで英語を耳から input してリピートするといったことをあまりしなかった人はこの①が苦手でしょう。まずは**リプロダクション**（英語を聞いた後、そっくり真似をして言う）や**シャドウイング**（英語を聞きながら真似して言う）や**音読練習**でトレーニングしましょう。そういった訓練を大人の場合は1000時間（1日1時間で3年弱）ぐらいすればかなりの効果が期待できます。

## 2 語彙面

一番の弊害は「英和辞典」やシケ単のような「単語集」によるボキャビル。特に悪いのは、代表的な意味だけ読んでわかった気になり、例文やフレーズや他の用法をほとんど読まない方法で、このアプローチでは、英単語の意味の広がりがつかめず**語感**が養われません。また**コロケーション**（語と結びつくフレーズ）で覚えていないため、英語の語彙を正しく、幅広く運用することができません。

## 3 文法面

特に重要なのが「時制」、「前置詞」、「冠詞」。文法的英文分析などは、発信力

UPに（受信力にも）あまり重要ではありませんが、英文法をもう一度「**発信型実用英文法**」の見地から、真剣に勉強しましょう。これは100時間ぐらいあれば大体マスターできますが、スピーキングやライティングで楽に使いこなせるようになるには、その10倍ぐらいの年季がいらいます。

#### 4 発想面

これを語るにはどんな発想の英語を話せばいいのか、話す必要があるのかを明示した「コミュニケーション哲学」を確立する必要があります。私たちが英語を学ぶ時、「日英の発想の違い」とそこから来る「母語の干渉」があるためいろいろな問題が起こるのですが、まずよく指摘されるのが**日本語と英語のロジックの違い**です。「推論して意見を主張するという議論展開」へのアプローチが、英語では概してポイントを述べてから証明するといった直線的なものであるのに対して、日本語のコミュニケーションでは、話が流れていく円的なものになっています。このため日本人が英語でコミュニケーションしようとする時、いろいろな問題が起こってくるわけです。この点についてはChapter 9のアーギュメント編でくわしく練習しましょう。

#### 5 背景知識

いくら英語がうまくても、話す中身がなければ大人としては誰からも相手にされません。**社会人として教養を身につける**ことは英語をする・しないに関わらず大切なことです。またChapter 11で述べる英語の検定試験・資格試験の対策勉強によってもさまざまな背景知識を養うことができます。

# 1-4 英語の学習時間と「到達度」との関係とは！

2002年から小学校での英語の授業が導入されましたが、それ以前は**中学・高校6年間の学校での英語の勉強時間は約1000～1200時間**でした。家庭学習は個人差がありますが、あまりしない人で6年間に1000時間、よくする人なら2000時間くらい勉強している計算になるでしょう。さらに大学での英語の勉強時間を入れると、英語関連専攻の場合、大学の授業だけで約1000時間、それ以外の専攻なら約200時間。大学生の家庭学習は英語専攻の場合、あまり熱心でない人は4年間で約1000時間、よく勉強する人なら約2000時間、英語専攻でない人は、それぞれ約100時間、200時間くらいでしょう。まとめると、中学入学から大学卒業までの10年間で、日本人は最低約2000時間から最高約6000時間、英語を勉強していることになります。

そこで、よく言われるのが「なぜ10年も英語を勉強して、日本人はあんなに英語が下手なのか？」ということです。このことを検証するために、先ほどの日本人の10年間の英語学習時間とその成果と、日本語を母国語としない外国人の日本語学習時間とその成果とを比較してみました。日本語を外国人に教えているベテランの日本語講師によると、海外から来た人がゼロの状態から日本語を始めて約1年半～2年で日本語検定1級合格、つまり次の表の上級レベルに到達します。



\* 外国人日本語学習者の日本語運用レベル&到達所要時間 \*

レベル	運用レベル	到達所要時間
初級 4級	初歩的な文法・漢字（100字程度）・認識語彙約800語・運用語彙約300語を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、または短い文章が読み書きできる能力。日本語ドラマ理解度は2%ぐらい。	250～300時間学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル。
初級 3級	基本的な文法・漢字（300字程度）・認識語彙約1500語・運用語彙約600語を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。日本語ドラマ理解度は5%ぐらい。	500～600時間学習し、初級日本語コースを修了したレベル。
中級 2級	やや高度な文法・漢字（1000字程度）・認識語彙約6000語・運用語彙2000～2500語を習得し、一般的な事柄について、会話ができ、読み書きできる能力。日本語ドラマ理解度は20%～25%ぐらい。	1000～1200時間学習し、中級日本語コースを修了したレベル。
上級 1級	高度の文法・漢字（2000字程度）・認識語彙約1万語・運用語彙3000～4000語を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力を持つ。日本語ドラマ理解度は50%ぐらい。	1800～2400時間学習し、上級日本語コースを修了したレベル。
超級	認識語彙は2万語以上、運用語彙は約1万語を習得し、文法上のミスもなく、日本語でプレゼンや討論ができる。日本語ドラマの理解度は75～80%。	8000～10000時間学習し、1級高得点合格者が日本の文系大学で4年間真剣に勉強したレベル。

このように日本に滞在し、日本語検定試験を目指して専門学校に通い、週に20時間は日本語の勉強をする人の場合は、最短距離で、（学校で20時間+家庭学習10時間）×40週×1.5年、つまり約1800時間の勉強（これは早い人の場合で、普通は2400時間かかる）で、大体1級レベルに到達します。高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（1万語程度）を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力を持ち、日本語ドラマが50%ぐらい理解できるようになります。話す日本語が母語の干渉によって若干不自然になったり、語彙、助詞の使い方もまだまだ日本語のネイティブには届きませんが、**十分コミュニケーションしている**と言えるレベルに達しています。

これに対して日本人の英語力は、TOEFL のスコアは世界でもほぼ最下位と言われ、「発信力」に関しては、ほとんど英語が話せない人が多いという最悪の状態となっています。事実、TOEIC900 点を取った人でさえ、「英語を話すのはイマイチ苦手」という人が多いのが現状です。これが英文ライティングとなると、さらに苦手。上智大学の英文科卒で TOEFL も 620 点近くあり、4 年間ずっと英語で論文を書いてきたという日本人留学生が、アメリカの大学院で修士論文を提出すると、教授に「これではマスターはやれない」と言われたそうです。「どこが悪いのか教えていただければ直します」と言うと、教授に「あまり悪すぎて言えない」とまで言われたそうで、このことはいかに日本人のライティングが悪いか、「発信力をつける」という観点からは現在の大学での英語教育に、いかに問題があるかを顕著に物語っています。

このように日本人英語学習者の発信力に問題があるのは、すでに有名な話となっています。何年英語を勉強しても思ったように話せない、書けない日本人英語学習者。一方外国人英語学習者（日本語の会話を短期間で習得するモルモン教の伝道者も含めて）や外国人日本語学習者は、比較的短期間でなかなか上手に書いたり話したりしています。一体どうしてこういった差が生まれてしまうのでしょうか？ どうやら外国語をある一定の期間に習得するのが上手な人たちは、次のような勉強方法を行っているようです。

# 1-5 外国語スピーキングの「達人」の勉強法とは！

- ① 「発信型」の勉強をしている。
- ② 「直説法」で勉強している。
- ③ 自信をもって振舞う。
- ④ 「言語表現力」&「論理的推論能力」が高い。
- ⑤ 母国語と習得対象の外国語が似ている。
- ⑥ インテンシブに勉強している。

## 1 「発信型」の勉強をしている。

特に西洋人に多いのですが、コミュニケーションの手段として、**即使えるスキルを身につけよう**として学ぶため、知らなかった表現を見つけると**繰り返し音読し自分のものにしてしまおう**とします。これは私たち日本人の言語学習態度と大きく違います。外国語を使う必要性から来るモチベーションとも関連があるのですが、日本人の場合英語を使う機会があまりないので「発信力」をUPさせる意欲がそがれているのに対し、日本に来て生活しなくてはならない外国人や、モルモン教徒などの布教者は、「発信力」UPへの気合いが違います。

また日本語学校やヨーロッパの学校ではライティングの授業にも力を入れており、授業中に30分で短いエッセイを書くテストが頻繁に行われ、「**インプットしたらアウトプットもする**」という姿勢がしみついているようです。残念ながらこれも日本の英語教育には見られない点です。

## 2 「直説法」で勉強している。

日本語学校では中級以上では、日本語のネイティブスピーカーによってすべて日本語で授業がなされており、このことは「直接法」による語学指導の効果を物語っています。これに対して、日本の英語教育は、日本語つまり「間接法」によってなされています。

外国語学習は、中学1年程度までのまだ日本語が確立していない時は、「直説法」で英語に馴染ませ複雑な文法も教えず、それ以後の**中学校高学年、高校、大学は**

「直説法」を基調にしながらか、「間接法」も取り入れて、複雑な文法・語彙や読解、英作文などを「発想の違い」もふまえて補足解説していくのがベターだと思います。また直説法の英語教育は、日本の英語教育に欠けている「リスニング力UPトレーニング」にとっても役立ちます。英語の発信力UPにはこのリスニング力が不可欠で、直接法が非常に効果的です。

### 3 自信をもって振舞う。

西洋人と日本人が日本語で会話していて、そんなにすごいレベルでもない日本語なのにほとんど西洋人がしゃべっていて、日本人は聞き手に回っている、というシーンを目撃したことはないですか？ 概して、日本人は文化的背景から、欧米人や中国人などに比べ、控えめで自己主張や議論をすることを躊躇する傾向があり、これが「発信力」をUPする上で妨げとなっています。

### 4 「言語表現力」&「論理的推論能力」が高い。

論理性や言語表現能力については、①や③と関連していますが、英語のコミュニケーションが直線的であるのに対して、日本語のコミュニケーションは円的ロジックです。このため欧米人から見ると日本人の英語は何を言っているのかわかりにくく、英文ライティングにもこの傾向が顕著に現れてきます。英語でのコミュニケーションは西洋のロジックが基調になっているので、日本人にとっては大きなハンディキャップになっています。

### 5 母国語と習得対象の外国語が似ている。

言語の類似性については、ヨーロッパ人にとって英語は同属言語なので、日本人よりは英語を覚えやすいでしょう。同様に西洋人より日本人の方が中国語を覚えやすく、西洋人より中国人のほうが日本語を覚えるのに有利だそうです。日本語と英語との多大な違い故に、日本人にとって英語を習得するのは非常にチャレンジングなこととも言えます。



## 6 インテンシブに勉強している。

**intensive**(= concentrating a lot of efforts on one particular thing in order to achieve a great deal in a short time) に学習することは、外国語の習得に関して重要です。週に1回英会話学校に通って70分程のレッスンを受けて20年間勉強するよりも、英語圏に半年住んで1日6時間以上英語の勉強を集中的にやった方が効果的です。両者とも日常の英会話を習得するのにかかるといわれる約1000時間の学習に相当するわけですが、自宅学習もせず1週間に1~2回英会話学校に通っても、記憶が定着せず時間の割に英語は上達しません。逆に、前述したように日本語学校では効果を挙げていますが、それは**少なくとも1年間に1000時間勉強する**ようになっているからです。

以上、「英語の発信力の定義」、「日本人の英語発信力の問題点」、そして外国人の日本語学習との比較などについて述べてきましたが、そこから得られる教訓は次のとおりです。

### \*英語学習上の注意点\*

- ① 「発信型」の英語学習をする。
- ② 英英辞典をフルに活用する。
- ③ 英語をよく聞き英語のリズムを体得する。
- ④ 類語の使い分けやロケーションを覚える。
- ⑤ 基本動詞〔句動詞〕を習得する。
- ⑥ 英語のロジックを身につける。
- ⑦ 英文法はニュアンスの知識も含めて発信的見地から体得する。
- ⑧ インテンシブに英語の勉強をする。

そこで、本書ではそういった日本人英語学習者の弱点・問題点を克服するために、次の徹底トレーニングを行います。

1. 「発信力」UPのための英語の音声・リズムトレーニング（→ Chapter 2）
2. 「発信力」UPのための語彙・表現力UPトレーニング（→ Chapter 3,4）
3. 「発信力」UPのための英語の発想力・論理性トレーニング（→ Chapter 5）
4. 「発信力」UPのための文法力UPトレーニング（→ Chapter 6,7）

これらの4点を鍛えていくことが英語のスピーキング力 [発信力] UPの最短距離です。皆さんが英語の勉強方法を「発信型」に変え、本書の内容をマスターし、すばらしい「英語の発信力」を身につけてもらえれば作者冥利に尽きます。それでは最後まで頑張ってまいりましょう。

**Let's enjoy the process!**